「身元保証」

森川耕一　（50 代）

高校三年の夏休みに東京から鹿児島まで自転車で行くという冒険旅行に出たのだが、一番の目標は「鹿児島への到達」ではなく「一人になりたい」というものだった。当時、私が住んでいた住居はとても狭く、個室はなかった。高校生男子にとって、六畳間を兄と共有し、それ以外に行くべき部屋がないというのは、息が詰まることだった。東京から鹿児島までの五十日間は、その窮屈さから解放される。猛暑や上り坂などは、ほとんど苦にならず、ただただ、一人の気楽さを堪能していた。

ところが、出発して一週間ほど経った頃だろうか、旅の予算が想定以上のスピードで減っていることに気付いた私はある日、節約のために屋根のついたバス停で野宿をしていたのだが、そこへ警察官がやって来た。近所の住民から「不審者がいる」との通報が入り、駆け付けたのだ。

「キミ、家出じゃないだろうね？」

険しい目付きで詰問してくる制服姿の警官に、私は必死で「不審者ではない」ことを訴えた。結局、その警官は納得してくれたのだが、こんなことを言った。

「キミは自分では冒険家のように感じてるけど、ハタから見れば家出少年だよ」

真っ黒に日焼けした顔、荷物を満載した自転車、薄汚れた髪の毛と衣服……。なるほど、そうだったかもしれない。警官は続けた。

「野宿は犯罪行為ではないけど、十七歳の未成年が旅の資金を持ったまま寝込んでいる姿を見過ごすことは防犯上、できない。だから、いつ職務質問に遭ってもいいように、いつでも家族と連絡できるようにしなさい」

両親は共働きだし、兄も妹も学校やバイトで留守がちである。それでも事情を電話で話すと、受話器の向こうで約束してくれた。

「交代制で対応するよ！」

以来、行く先々で職務質問されるたびに私は家に電話をし、家族から、

「息子は家出じゃありません」

「お兄ちゃんは家族です。一時的に旅をしているだけです！」

と身元保証のようなことをしてもらった。

一人になりたくて単独での冒険旅行に出た私だが、旅の最中に感じたことは「家族がいることの有難さや心強さ」だった。帰る場所があり待っていてくれる人がいるからこそ一人旅が楽しいことを、私はこのとき知った。普段は意識することさえない家族の絆は、家族から遠く離れた場所で感じることができる。

自転車で五十日間も旅を続けることは肉体的にも精神的にも大変だったが、目的地の鹿児島まできちんと到達できたのは、電話の向こうで私のことをサポートしてくれる家族の力があったからこそだった。

最終日、旅が終わることは寂しかったが、
「ただいま！」
と言える相手がいることは、何にも代え難い幸福だとも思った。